

浄土

二十二月號



目次

浄土の存在について(三三)……(二)

中村辨康

動植物を愛する心……(四)

ジャック・フリンクリー

生活斷想……(六)

永見七郎

隨想

黄菊白菊……(八)

合田微雪

信仰相談……(一〇)

中村辨康

佛を信ずる心……(一三)

吉原元明

童話 お寺の鐘……(一四)

増山一彦

編集後記……(一六)

法然上人鑽仰會發行



淨土の存在について (三)

中 村 辨 康

第三章 往生と云ふこと

般若心經の終りにある呪文は、一般的には成佛のことのやうに云はれるが、つぶさにそれを味へば「往生」のことである。即ち翻譯すると

「行け！ 行け！ 向ふ岸へ行け！ 向ふ岸に行きつけ

ばめざめ、(菩提)がある。」

と云ふことであつて、迷ひの世界から覺醒の世界へ往き生れることを云つて居るのである。聖道流義では「成佛」と云つて居るが、その言葉は場所を指したもので個人的な意味を持つて居る。それよりもむしろ環境を中心とした「往生」を云つたものと見る方がより妥當である。然し一般に「往生」を死後のこととのみ考へて居る爲に、現實的に「生きる」意味はなくなつて「死ぬる」ことのやうにさへ取られてしまふからこの呪文も往生とは考へなかつたのであらうと思ふ。

これは封建制度が、殊には徳川幕府の政治力が然からしめたものであつた。長いものには巻かれろとか、何事も因縁づくとかきらめろとか、相變つてはならないとか云ふことが是認された時代であるから、此の世はとにかくも未來ではなどと云ふやうに、死後にのみ望みがかけられてしまつたのである。

然るに法然上人の御言葉に「一念に一度の往生を當ておきたまへる願なれば、念々毎に往生す」と云ふのがある。南無阿彌陀佛と稱ふればその一念は確かに淨土に轉生して居るのであるから、念々の念佛は念々の往生であるわけである。また「此界一人念佛名 西方便有一蓮生」と云ふことばもある。即ちこの娑婆界に於て誰かが念佛すれば、西方淨土に一の蓮の花が咲くと云ふのである。

このやうに「往生」とは精神的なもので、そこには物的存在の意味は無いのである。即ち現在が精神的に化生するところに未來もまたそれが可能であるとするもので

ある。然かも現實を基礎として永遠をも考ふることの方が誠に正しいと思はれる。

現在はどうあらうとも未來をよくしたいと考へることは、それだけ現在が虐たけられて居るからであり、現在は如何にあがいても何にもならないからである。現在がよくなることを誰が否む者があるであらうか。然かも現在が基盤となつて未來へ進展して行くものであることは間違ひのないことである。それを現在は少しもよくないが未來には一變してよくなるとは、希望としてはあり得ても、事實はさう甘く轉回し得るものではない。そしてそれは精神的に變化することであつて見れば、今の現在に於ても精神的に變化し得る筈である。

それが即ち變易生死の死と生とである。精神的の變化であるから、この死生は何回でも繰返し得られるが、分段生死はこのからだの生死であるから一回限りである。四大と云つて堅いものと、動くものと、水分と、溫み味との四つが集つて居るこの物的なからだは、生れて來るのも一回限りであり、また死ぬるのも一回限りである。生れ代りも無論あるけれども、それは前のと全く同一と云ふことはあり得ないから「甲」がそのまま「甲」とはならないのである。また精神的には遺傳として再生し得るにしても甲の遺質と乙の遺質とが重さなつて丙と云ふものになるのであるから元の甲と全く均しいものではあ

り得ない。

この意味に於て往生は現實の往生があつて初めて永遠の往生があり得るのである。現實の往生が實には永遠の往生なのである。捨此往彼蓮華化生と云ふことも現在に於て精神的にあり得ることであつて物的なものが此處を捨てて彼處に行き蓮華の上に生れるのではない。精神的に穢き所を捨てて理想の世界に生れ易り、その清きこと蓮華の如き状態に安住するところの信仰的變化を云つたのである。此の變化があつて初めて死後永遠の往生もあり得るのである。

さればこそ一念が一度の往生をなすのであり、その一念を重ねて行くところに本當の信仰生活も未來の往生もあるのである。かう云ふ考へ方は封建制度の下では押へつけられて居て隨つて現在生活上に於ける發展の芽を出さしめる機縁を與へなかつたから往生は唯だ死後のこととのみ信仰的に歪曲されて居たのである。

然かも政治的權力の下では之れに服従するより外に生きる道がなかつたのは、正しく日本人の性格の弱さである。然かも敢然として立つものがなかつたことは、一面に日本人と云ふものは非常に素直な性格だからとも云へる。

殘念だが今度戦争に於ても之の例を澤山見ることが出来る。それには善い點もあり悪い點もある。私達はかう云ふ短所を長所とすることに努力し反省しなければならぬ。ここに往生の意義をもつともつと擴充して生活の中に確認する必要があると考へられる。



動植物を愛する心

英國軍少佐

ジャック・ブリンクリー

新生日本は、終戦後すでに第三回目の新年を迎えようとしている。第一年目よりも第二年目、第二年目よりも第三年目と、復興の速度は早まり、恢復のしかたは早い。日本の将来は明るい。しかし、よく現實を見つめると、いろいろ考うべき問題がある。

私は終戦直後、香港から山口の岩國に、飛行機で進駐してきたが、暫くはなれていた日本の變りはてた姿を眼下に見て感慨深いものがあった。はじめに私をおどろかしたことは、町が非常に汚くなつたことであつた。美しかつた日本が、戦いのために破壊されているのは、止むを得ないとしても、汚くよごれているのは、日本人のすさんだ心のあらわれのように思われて、淋しかつた。岩國から汽車に乗りかえると、都會という都會は全部破壊されている。餘想外にひどく、思つたより汚ない。私は憂鬱になつた。しかし、それに反して、自然の美しさはどうであらう。九州のはてから瀬戸内海の美しさ、箱庭式のもののつた美しさは、しばらく日本をはなれていた私を、こと新しく驚嘆せしめた。激しかつた戦火も、美しい日本の風景をこわすことはできなかったのだ。私はほつとしたものを感じた。そして、この天然の贈物を充分に活用しなかつた日本が憐れにも感じられた。日本の生きる

道は観光事業だと直感したが、戦争にかけた莫大な費用を、観光事業にかけたら、日本はもつと美しく静かな國になつていただろうと思うと、残念でたまらなかつた。ばかな戦争をしたものだ。誤つた軍閥がにくまれてならなかつた。この二つの第一印象は、先ず私に日本再生の道を暗示したが、汽車が進むにつれて、私の心はしだいに明るくなつていつた。

それは、窓外をよぎる人々が、思つたより弱つていないことだ。色つやもよく、體格もよく、元氣がある。他の民族にくらべ格段の相違である。しかも人口が密集していて、田畠は餘裕がない程に、よく耕されている。男よりも女が潑刺たる氣分を現わしている。日本の立直りは比較的早いと直感したが、その豫想は誤らなかつた。苦しい条件の中で、日本人は敗戦國民とは思われないように、明るく勤勉に働いた。戦前の日本にたち戻るためには、まだ幾多の困難にぶつつかるであらうが、この明るさと勤勉を失わないかぎり、それらは完全に克服されるであらう。事實、日本の回復は、どの敗戦國よりも快速調である。文化日本の建設も、そう遠い日ではあるまい。日本を愛し、日本民族に信頼の念をいだく私は、深くそう信ずる。

しかしその私にも憂えることが一つある。はじめにかいた日本人の心の問題である。町の汚ないことをすさんだ心の現われと言つたが、復興が早いにもかゝらず、乗物の混亂は終戦この方、一向に改らなればかりか、一そうひどくなつてゐる。すさんだ人心はますます暗い方へ深まつていくようである。他を愛する心が、日本人から失われてゐるためである。我利々々亡者が餘りに多いためである。この冷たい心は、動物に對する日本人の態度を見ると、なお一層よく分る。

食糧の不足にかこつけて、無慘にも犬を殺した、戦時中の殺伐性はあらためて言うまい。人間の愛にうえてゐる犬や猫、人間の仕事を手傳う牛や馬、農業に必要な渡り鳥などを、或いは理由もないのに殺したり、必要以上に虐待したり、食糧のたしにカスミ網でとつたりして平氣でゐる。公園の木を折り、可憐な花をむしりとる子供たちのいたずらは見のがされるところか、獎勵するような氣風さえある。日本人の動植物に對する慘虐性に、目を見はる外國人の多いのは、當然のことである。

英國では、家畜は家族の一員となつてゐる。犬が日本のように、人間にくつてかゝることは、殆んど見られない。人間は犬をいじめないので、犬もこわがることがないからである。赤ン坊が歩くようになる、弱い者を愛する心をうえつけるために、たいていの家庭では犬を興える。公園などで木を折る子供があると、大人はこんこんとさとして、植物を愛する心を養わしめる。英國人の公德心はこうしてつちかわれるのである。

英國のロンドン植物園の番人の話であるが、二十年間の勤務の間に花を折つた人間は、わずかに六人であつたということである。しかも六人の内、四人は外國人で、あとの二人は英國の婦人と白痴のこそ泥棒であつた。また英國の軍隊では乗馬靴の拍車に、日本のようにとげとげをつけない。若しもつけたら、紳士でないと社會からは糾弾され小隊長からはきつい叱責をうける。些細なことであるが、こんな所から、他を愛する公德心が養われるものである。

日本再建の鍵は愛の獲得にあると思う。他を愛する心が、日本に芽ばえてくれば、もうしめたものである。動植物愛護運動を文部省あたりが率先して實施し、小學生に愛護心をうえつけることは、次代日本のために最も必要なこと、と思う。又佛教は、佛心鳥獸草木にまでおよぶ、きわめて慈悲にみちた宗教であるが、その教えに即應して、かゝる運動をおこしたら、佛教再興のなによりものきつかけになると思う。むつかしい教えを説くより、その教えを社會の中に生かすことが佛教本來の任務である。佛教がキリスト教に劣つてゐるのは、その教えが社會化されないところにある。また現代不振の原因もそこにある。次代を背負う少國民に、動物をいたはり植物を愛する心をうえつけることができれば、日本再建のいしずえを作ることができたのである。ひいては佛教を生かすことにもなる。

私は佛教の世界化を念願とし、そのためにいろいろのプランをたててゐるが、せつかくの慈悲の教えも、たゞ單に教典の中に埋つてゐることを、深く残念に思つてゐる。



生

活

斷

片

永 見 七 郎

また主食の遅配がつづくが、ゆつくり落着いた風をしている。何か本でも賣らねば芋も買えないので、本當は落着いてなんかいられないのだが、じたばたしてもはじまらないから一寸ふてくされているのだ。頭も悪くて何も書けないが、好きな畫集をあつちこつちめくりながら、悠々と煙草をふかしている。書きたいものもないので、ぼんやりしている。僕もいい年になり心境も進んだ。ぼんやりしている幸福がわかるようになった。仕事なんてくそくらえだ。僕はどうせ忘れ者だ。

ラジオが天氣豫報を報じている。北海道から九州まで、明日はいい天氣だといっている。静かな平和な感じだ。僕はラジオで一番好きなのが天氣豫報だ。あれを聞いていると、まるで高い空から日本國中を眺めているようで何ともいぬ悠々とした感じだ。子供らはとつくに寝てしまい、妻も「お先へ」といつて隣りの部屋へいつてしまった。僕は一人残つてとりとめもない感想を書いている。

のん氣な男が糸をたれている
魚が時々餌にくいつくので

うきがびくびく動いているのに

少しも竿を動かさない

あの男は新米のつり手ですか

いやあの男は静かさをうつっているのだ
びつたりした材料が見つかるまで、僕はじつとがまんしているのだ
びつたりした材料が見つかったら、今度こそ僕でなくては書けない
ものを書く。

ある男がそういつた。眼を輝かしながら……、
芋でも何でもともかく食え、家族一同元氣で、友だちからも愛され
ている。これが幸福でなくて何だ。そんなことくらいで喜んではいか
んと教えられても、うれしくなるのだから仕方がない。ありがたう。
ありがたう。愛がまた僕の心にもどつて來た。汚れたもみくちやだら
けの僕の心が急に生々とし、美しい泉のようにこんこんと喜びを湧か
す。

静かな夜、天使と話の出来る者は幸福だ。

こんな月のいい晩、美しい戀人と散歩している若者はどんなに幸福
だろう。

だが机に向つて詩を書いている私も悪くはない。

私にも今夜は千載一遇の好機會なのだ。

書ける、いくらでも書ける。

喜びの詩、感謝の詩、人生は美しいという詩、生きることと楽しい
という詩、神はほむべきかなという詩。

みなさん、幸福であつて下さい。人生の喜びを知り、元氣でがんばつて生きて下さい。淋しいことや苦しいことがあつても、それにまさる喜びや幸福がある。あなた方の愛する家族や友人、先輩がいつもあなた方に愛を送つてゐる。愛したり、愛されたり、人生はそういうすばらしいことで一ぱいなのです。ホイットマンでさえうらやんだ幸福です。何もむづかしいことはない。氣がつけばあなた方は幸福ではありませんか。愛を送れば愛を送り返される。僕も馬鹿で永い間この簡単なことに氣がつかなくつたのです。この人生最大のことにうかつたつたのです。だが、氣がついたら何というすばらしいことでしよう。僕は妻と二十三年もの間助け合つて生きてきたのです。それだけだつて幸福すぎるのに、僕には子供もあり、それに思想上の兄弟姉妹というべき友人、先輩も多いのです。子供は一人死にしましたが、今となればどこかで私を愛し祝福してくれているようです。私の言葉は貧弱ですが、どうかみなさん元氣であつて下さい。

○静かな夜

静かな夜

戀人の足音を待つ者は幸福だ

静かな夜

詩の書ける者は幸福だ

だが静かな夜

足弟姉妹のために祈れる者はもつと幸福だ

○

破れ障子

ぼろ／＼の疊

机の代りに古びたお膳

だが、その部屋には神が與え給うた静かさがある

静かさ

美しい静かさ

詩の母胎

秋の夜、貧しい詩人がそんな詩を書いた

○テラコッタづくりの歌 その一
私はフィデアスのような力はない

パルテノンやオリンピアの殿堂にふさわしいような

大彫刻は出来ない

だが、私は小さい人形をつくる事が出来る

小さい女、子供、犬、馬、豚

それに私は私の心をこめる

私の愛を生かす

誰も見てくれないかも知れない

すぐこわれてしまいかも知れない

しかし私は私の心をそつと封じておくのだ

○同じく その二

私のつくつた小さい人形よ

もし私の死後まで残つたら

私の愛を伝えてくれ

私がどんなに人間を愛していたか

人間を信じていたか伝えてくれ

人間がどこまでも生きたがつてゐること

自分が生きることとは他人の生きることの

邪魔にはならない

獨立した人間と人間とは必ず愛し合つて生きられる

そのあつい信仰をつたえてくれ

○同じく その三

私が小さな人形にこめた愛はきえない

たとえ土にうつもつても

それが残つてゐる限りはきえない

見る人はきつと微笑してくれるだろう

そして心に愛の灯をともしてくれるだろう

私はそれを信じる

お目出たき私は

實話

黃 菊 白 菊

合 田 微 雪

— 黃 —

菊 白

— 菊 —

いま私は、或病院に入院しているパンパンガールのお見舞に行つて歸りました。可哀そうに彼女は骨と皮になつて、面會謝絶と貼紙された部屋の中に横たえられていました。でも嬉しい事には、同じ職業の女性ながら、親身も及ばぬ人の手厚い看護を受けていました。彼女はキャンプ專屬の外人や、市内の日本人數名の醫者にかゝつていましたが、出たり引込んだりする其熱の原因が不明との事。

其彼女が附添の人に「○○さんあたしの體本當に治ると思う？ それとも治らないと思う？」と云つたという事をきいて、矢も楯もたまらなくなつて出掛けられた私でした。女心は女ならばこそ、せめてお見舞のしるしにという妻の心盡しの、庭の一隅に丹精して置いた黃菊白菊をたづさえて。

パンパンガールといへば、随分見下げられた職業婦人とされていきます。然し——。

最初こそどうだつたか知りませんが、お互の心が理解されてくると、彼等は世界一優しい日本のお嬢さんとして慈しみ、そうして立派に家

庭を作つて傍目にも羨しい夫婦生活を營んでいます。其上任期を二年も延ばすべく願出た者も尠くありません。個人の力ではどうする事も出来ない、永遠に別れなければならなくなつた者も一樣に「故國に歸つても貴女程良い妻はもう得られないでしょう」と別れを惜しんで呉れるとか。こちらはこちらで、二人の間に宿した子供は夫の居なくなつた後々も大切に育て、ゆくといつています。

パンパンの總てがそうだとはいえませんが、彼女達を口から泡を飛ばして罵倒したり、目尻が切れる程白眼視している人達も少し反省してみる必要があるのではないでしょうか。果して自分達の夫婦愛が、家庭生活が、彼等と比較して、うるほいに満ちているか、自然で正しいか、今一度進めて、本當の意味に於て神聖嚴肅と云いきれるかどうか。

包まず申します。いつも近隣の方達の井戸端會議等で、羨ましく限りと刻印捺されている私の家を振返つてみても、口先でこそ封建打破など、並べながら依然暴君の衣を脱がうとしない自分。今は男女同權

ですつてね」と云いながら飼猫のように卑屈な妻。

スプーンをゆかの上にベタリと置く非衛生極まる日本茶道。すべて其式になる嘘の禮式で、うわべだけは波靜かに見えていても、水底は何と魔の淵さながらの意地を藏して、(それ程でも無いかな)「夫婦長幼おのづから序あり」の立札をまだ取除かうとしない物臭さ。

これが私の家の偽らない描寫圖ですが、まだ／＼いろんなのが各家庭で描かれている事でしよう。

われ／＼に對して、もつと純粹な生活のあり方を教え、また荒廢したこの國に、案外やさしい花も咲いている事を、外國人に示して呉れた彼女達。その一人である女性の枕下に坐つて私は申しました。

「貴女は、自分が助からないのではないかという様な、頼無い事と云つたそうですが、そんな事では駄目ですね。この私だつて、六つの時、十三の時、廿歳の時と、もう三度も病氣で死損いました。(體驗談中略)必ず治ると自信を持つ事。また治さねばならぬと最良の方法を講じるよう努力する。そうすると案外神様も面倒くさくなつて、ものぐさにも此世に、ほつたらかして呉れるものです。屹度です。受合います。どんな事があつても本當に生きたいでしよう。貴女自身の爲にも、彼氏の爲にも、そして——」

幸い昨日から、全然無かつた食欲が少し出たそうなので、私は眞剣に力つけて上げました。が依然食欲も無く、消えそうな灯の如きものだつたとしても、此度に限り、私はなまじ佛様のお話など持出さなかつたでしよう。

深い川邊に、無心に立つた幼兒に對して、思わず「危い！」と叫んだばつかりに、反つて驚いて眞逆様に落つこちさせた話もある。

理屈でこそ曲りなりながら説明し得た積りでも、宗教など全然御存知ない此重病人には、徒に不吉な餘香を残す結果となりはすまいか。「往生」の眞意を遂に解し得ず、助かるべき命さえ散らして仕舞うのでは?と考へ、これにお説教が行われたという例さえ、一、二耳にしています。

どんな絶望の身でも、人間誰しも生き延びたい希望を固持しているもの、なまじな「あんじん」をきめさせるなど死刑を宣告すると同様残念なものです。

ある老人が重態になり、自分の棺桶が見たいといふので、早速木の香も鼻をつく新調品を病室まで運んで本人に見せたところ、「もう少し大きくして呉れ」といふ。また直ぐ拵え變えてお目に掛けると、ぐつたりとした瞳を老妻の方へ僅かに向けて「お前と一緒に仲良く入ろう」斯くて間もなく絶命。老人のこの孝行息子は、學校の教師でした。

お話が脇道へそれてしまいましたが、さつき私が病人に申しました言葉がまだ残つていました。「そして——」其次に何と云つたとお思ひになりました。私は「そして——國の爲にも。」とハッキリ申しました。

私は人を見る度に自分の手本となる個所を求めています。一つも世の爲に盡している積りである人より、濟まないと思ひながらいる人の方に、より深い尊い物を藏していると感ぜられる場合の方が多いようです。

口にするさえ忌むしい職業人のお話などを致しましたが、こんな職業人になるなどは以ての外ととなるより、少しでも少くも濟むような社會を作るべく、お互に努力しましょう。

信 仰 相 談

信仰上の悩みや佛教についての疑惑にお答えします

擔 當 中 村 辨 康

確信と回心と及び反省

(問)

私は無學な農業をして居る者ですが、昭和十年の九月不圖した御因縁で「淨土」が手に入りそれ以來今日に至るまで

求道心になやみ或は喜んだり又ぐらついたりしてかなしんだり泣いたりして居ります。

淨土の愛讀者で、先生の御親切な御指導を毎々有り難く存じ感謝して居るのみならず、あれから十三年一日として阿彌陀様のことが忘れずお念佛もたえず稱えさせて頂いて居り、今では幾分か心が落ち着き道理もわからせて頂きました。昨年の八月九月號の淨土の存在について御説明も誠に有難く納得させて頂きました。然し先生私はまだ金剛の信が與えられないような気が致します。随分お寺参りもし

一度先生にお目にかゝらせて頂いたら屹度安心が出来ますことゝ思いますけれど、老いたる身にてとても今世でお目にかゝらせて頂けないと思ひまして、せめて誌上でなりともと思ひ、御多忙とはお察し致しますが、左記のことをおたづね致します。どうぞお身體を御大切に遊ばしますようお祈り申上ります。

一、轉機とか回心とか宿善開發とか信の一念とか、私の心におぼへがなければ信仰が本物でないと思

われませんが如何でしょうか、私にはおぼへがありませんのでそれでは氣にかゝり安心も出来ずかなしうございます。

二、私の煩惱の心を反省させて頂くのが信仰のお力と思ひますが、又それが大み命の中に歸一させて頂いて居る姿と思ひますがまちがいでしょうか。(山口・岩永・後藤シゲノ)

(答)

信仰は事實であり、信仰の理解は概念でございます。すから、これを一つに考えて或は悩んだり悲觀したりすることは、實は思ひすごしたことでございませうけれども、中々そうハッキリ區別し得る人がありませんから、人に質ねて見ても諒解が出来ずに苦

しみ悩む場合が相當に多いと存じます。貴女の場合も之に近いものと思ひます。

信仰は生活の事實でございますから、概念から離れて事實をよく眺めるのがよろしいのでございす。本當に心から南無阿彌陀佛々々々とお念佛が出来、如來様のお慈悲にすがるより外に別の方法がないことをよく反省することが出来れば、その外には何もいらぬのです。またこの心のぐらつかないことが即ち「金剛の信」なのでございす。何か特別の心境があるとお考へになつてはいけません。法然上人のお言葉の中に「身の毛がよいだつたりなどする人もあつてそれをよいことゝ考える人も

あるようだが、それは悲喜歡喜と云うもので信仰そのものではない」と言われ、それは信仰に附隨して起る宗教感情ではあるけれども必ずしも必要なものではないのであり、また信仰そのものでもないと言われて居ります。

またウイリアム・ジエームスの「宗教經驗の種々相」の中には色々な宗教經驗の有り様を説いて居りますが、ハツキリした「入信の自覺」として或る宗教經驗例えばエクスタシーと云つて自己催眠のような恍惚とした精神状態になるとか、又淨土信仰でも念佛中に無意識状態になつて今までに經驗したことの無い特別な感情を覺えたとか、或は光りを見、或は明相を見るなど云うようなことは一つの宗教經驗であります、それは誰にでもあると云うものではなく又無ければならぬと云うものでもありません。ジエームスなどは統計上そうした人々は、多く「小聖者」に終る傾向が多いと云つて居

ります。私の知つて居る人で現に「見佛した」とか何とかさわいで居ましたが、後に日蓮宗へ走つたかと思つたら、今度はまた大本教に行つて頻りに鎮魂歸神にこり始め戦争中には「神がゝり」のようなことを口走つて居りました（其後どうなりましたか暫く遇いませぬが）。このように信仰にぐらつく人さえありますので、そんな宗教經驗などは全く當てにはなりません。それ故轉機とか回心とか云う宗教經驗は精神上の一時的現象であつて、若し後にぐらついたならば何にもならなかつた譯で、むしろその人を毒したことにもなります。これは一種の精神現象を機として轉心するものであつて神秘的な要素を多分に含んで居ります爲に非常な危険性があるわけであります。順調に行けばよろしいが、下手をすると迷信的な執着となつて、正しい信仰とは相去ること遠しと云うことにさえます。宿善開發と云うのもそうした状態の

時にも云いますが、又そうでなく唯だ信じて得た謂ゆる「信の一念」の起つた時にも言います。要するに無信仰の者が信仰者になつたその時を「宿善開發」したと云いますから、必ずしも或種の宗教經驗的精神状態が起らなくてもよいわけでございます。

佛教特に淨土教ではこうした特殊な状態を主張して居りません。極めて平凡な誰にでも通ずるものを要求して居ります。常識的に徐々に理解を深めると共に、徐々に宗教感情を段々と高めて行くのが正しいのでございます。その人は漸機と云つて急激な精神變化は見ないが、段々に導かれて一年二年三年とたつ内にスツカリ精神状態が今までと變化してしまふものがあります。即ち以前には物質的な欲望で心が一杯であつたのが、今では萬事が信仰中心であり如來様中心であつて、考えて見るとよくもまあこんな變つたものかとツクツク思われるのでございます。こ

の方がむしろあぶなげのない人で「様なきを様とす」とか「義なきを義とす」とか云う淨土の信仰にピッタリ當てはまる人でございませう。

貴女の場合は念佛が申され如來様が忘れられないのであつて見ればそれが即ち金剛の信であります。ぐらつくようでは金剛ではありませんが、思ひすとして居られるから自分で自分をぐらつかせて居るのであつて、そのぐらつくことはあなたに取つては「よそごと」でありますから御心配にならないで一生操を通して下さい。如來様を信じたその信心の操を守り通すことが「金剛の信」なのでございませう。

次に反省と云うことは何時でも必要なことで、謂ゆる「信機信法」とか「機法の二信」とか云うのがそれでありませう。信機と云う反省があればこそ「他力にすがる」のであり御本願が信ぜられるのです。自分に思ひ上がつて居ては信仰が

成立つ譯がありません。反省と信仰とは丁度繩をなつたようなもので、裏と表と互いに持ちつ持たれつして行くものであります。また大みいのちの中に歸一すると云うことは念佛のことで、私達は念佛に依つてスツカリ如來様と云う大

佛教と科學・淨土と平和

(問)

生物は自然科學を無視出來ません。宗教殊に佛教ではこの點古代からどう取り入れてありますか。

また生物は決して土を淨めて居りません。土を淨めると云うことは平和を意味するものと思ひますどうかこの點をお教え下さい。

(青森・北津輕・鶴田・野崎藤左衛門)

(答)

御質問の意味が私にはよく分りませんが、第一の御質問は佛教は科學を如何に見て居るか、又は如何に見るかと云う意味に解してお答えします。また

みいのちの中に融合して行くのでございます。

以上で大體お分りになつたかと存じますが、大切なことですから尙お分らないところはおたづね下さい。どうぞ御遠慮なく。

第二の御質問は「土を淨める」とは平和を將來するものと思ひうが平和を愛好して居る人間がなぜ土を汚してばかり居るのかと云う意味に解してよろしいでしょうか。

第一の御質問は科學は或る一つの問題を固定させてその形態を解剖して研究する學問でありまして西洋に於て發達したものでありますし、それも極めて近代的のものでありますから、佛教の成立時代には無論科學はなかつたのであります。隨つて取り入れたくも取り入れようがありません。ですからこの問題はむしろ無理なことでは

然し科學を佛教の立場から何う眺めるかと云うことになりますと之は明かに問題として取り上げられ得ることゝ存じます。

他の宗教では多く科學と牴觸する面が澤山あります。例えばダウインの進化論の如きは猶太教の創世紀とは相入れませんし、婆羅門教の梵とか神道の天御中主神などとは相入れませんから、科學を取入れることが出来ません。イヤ科學を入れてはその教がこわれてしまひます。

然るに佛教は決して科學に牴觸もしませんし、こわれもしません科學以上のものです。大谷光瑞氏は「佛教は科學なり」とさえ云つて居ります。この説の妥當か否かは別としましても、科學に矛盾するものでないことは事實です。即ち四大と云う「大」とか、極微と云う「微」とかは科學で云う分子若しくは原子に相當するものですし、その説の正否は兎に角須彌山説の如き世界觀がありますし、毘

奈邪藥事と云うお經には藥の事が非常に細かく説かれて居るし、其他計量的な數字や天象に於ける星宿るとも詳しく云はれて居るなど今で云う科學的なものも相當にあります。此點は確に他宗教と異なるところであると思ひます。

第二の土を淨めると云うことは何う云う意味なのか。土とは大地のことかとも思われるが、また國のこととも受取れます。即ち「淨佛國土」と云う意味でない「平和」との關聯がハツキリしません淨佛國土は佛道を志す人々の念願であり、一般の生物は必ずしもそう願つては居ないでしょう。イヤその反對に御説の通り國を穢してばかり居ります。だからこそこの世界を「穢土」とも云つて居りますでしょう。隨つてこの穢土を淨土たらしむるのが佛教徒の第一のつとめと云うことになりま

*

*

*

本年の秋は晴天続きで思ふたより取入れが早くすんだ。麥も蒔き蠶豆も植えビースも蒔き法蓮草や人參もまいたが皆な芽を出した。

天地の御蔭の力は大きいものと思う。同時に自分の弱少さがつくづくと思はれる。

御互に自分の罪に氣が付かなければ煩悶は起らない。所詮自覺しなければ煩悶は起らない。されば宗教は自覺の問題である。科學は分析智に由り、哲學は綜合智に由る。然し宗教は自覺智に基いて生きる道を受取るのである。自分で深く掘下げて初めて罪の深さを知り佛の有難さを受取ることが出来る。

罪と云うものは道德や法律の上にばかり云はれるものではない。神や佛の御心に背く反逆者は皆な宗教的に罪人である。親鸞は「愛慾の廣海に沈淪し名利の大山に彷徨す」と嘆かれたが、上下貧富貴賤皆一樣に人間としては、罪障の凡夫である。

觀無量壽經には最初に阿闍世王の事が出て居る。王は父を殺し母を幽閉し和合僧を破り修行者を惱まし佛に反抗した。謂ゆる五逆の罪人である。後に罪を自覺し佛に逢うことを得て救はれた。このように罪人を救うところこそ眞に愛の徹底である。

世には佛を客觀的にのみ求めて、求め得て

から信仰しようとして居る人々がある。寶物探がしをして居る様なものである。佛については靈感的に佛を信ずる人もある。

二には法に由て佛を信ずることもある。

三には「一切衆生悉有佛性」と説かれて現實の自分は罪の緊縛に苦しむとも内面的には御子たる素質をもつと信ずる人々もある。

四には肉親の親心を通うして佛を信ずる人もある。

佛についてはかくの如く色々な角度に由て

佛を信ずる心

吉原元明

説かれも信ぜられても居る。然かも信ずる人々に取つては佛の存在は絶對的である。佛の存在を知つて後に信ずるのではない。

大日比西圓寺の法道上人が天保十四年に三券七書と云う淨土の傳燈上大切なる書物を講ぜられた時、御弟子達に申さるるに「善導大師の罪惡生死の凡夫觀と法然上人の十惡愚痴の自己觀とは、隨自意か隨他意か」と御尋ねがあつた。弟子達は「隨他方便の御言葉であります。善導法然の二師何れも三昧發得の人

師なれば罪や苦みはない方々故善巧誘引の方便語である」とお答えした。法道上人は「それは淨土の骨髓を知らないものである。淨土の法門は極惡最下のももの爲に極善最上の法を説かれたのである。自分の信じない事を隨他方便の爲に申さるる事は絶對にない」と教訓されたさうである。

今大乘至極の淨土の教は人間としての苦しみを自覺し之れを解決することにある。それで唯一向に南無阿彌陀佛さしてもらふのである。

念佛ほど勝れた法はない。

宗教は觀念でもなく、概念でもなく、思想でもなく、學解でもなく、唯だ實行あるのみである。

法然上人に取つて四十三歳までの思惟と修行とに由て磨き出されたのが、即ち彌陀本願の單信唯稱の念佛の宗教であつた。宗教の深い味いは唯南無阿彌陀佛する事にあるのである。

今、書齋の窓に、中空の月は皎々とし映つて居る。

「月影のいたらぬ里はなけれども」

ながむる人の心にぞすむ」

の歌の心がシミジミと味はれてならない。

話 童

お 寺 の 鐘

増 山 一 彦

(一)

いりにはじめて火がはいった。大きなぞだが、灰になじまないで恥かしそうにいぶつてゐる。

「さあ、あしたからお寺の鐘がなるぞ、起きるのにはりがでるちゅうもんだ。」

父親が縄仕事をしながら、母親に話しかけた。

「でもまあ、よくかえつてきたもんだ。」

「やつぱり、寺に縁があつたのさ。猷納されたたくさんの鐘が、つぶしもされずに、雨ざらしになつてちゅうんで、住持さまがわざわざ行かしやつたら、一とう隅つこにちゃんとあつたというじやないかい。縁だよ。ほんとに縁だよ。」

良平は、今日の鐘供養を思いだしていた。供養されてつりあげられた鐘は、青さびて汚なかつた。だが、住持さまはじめ大ぜいの人々は、次々につき出される鐘の音に、うつとり聞きほれていた。

「さびついてるといふが、昔のまゝのいゝ音いろだねえ。」

母親が、針仕事の手をやすめて、言つた。

「これでまた、昔の静かな一日が、かえつてくるちゅうもんだ。それでも馬鹿なことをしたもんでねえか。大砲や鐵砲を作るちゅうんで、猷納させておきながら、がらくた同様にごろ／＼ころがしつばなしでよ。」

「佛様のものまでとりあげるんじや、戦争は負けだと、ほら、鐘がはこび出される日に、おらが言つたらう。馬鹿な戦争だつた。」

「鐘は村びとの命のかてだつたからのお。」

父親は良平を見上げた。

「良坊、毎朝毎晩、鐘の鳴つてたのをおぼえているかい。」

良平は考えてみた。おぼえているようでもある。ゴーン、ゴーン、たしかに頭のどこかでひびいてゐるようである。しかし、よく考えつめると、それは昨日の鐘の音で、昔の鐘の音ではなさそうである。無理に想い出そうとすると、聞いたようでもあり、聞かなかつたようでもあり、ぼやけてしもう。

「ようくおぼえてないなあ。」

「そうだろう、五つぐれえだつたからなあ。でも、お寺の鐘の音で目をさましたもんだよ、なあ、おつ母あ。」

「そだとも。おめえぐれえ、お寺さんの鐘ではつちり目をさました子供はあるめえ。」

「まつたく鐘で明け鐘で暮れた静かな時代だつたあ！」

良平は両親の話がわからなかつた。どうしてあんなに鐘の音をなつかしむのか、ふしぎでならなかつた。鐘の音で目をさました自分が、おかしいようにも思われた。

「良坊、もうおせえから寝ろ。明日の朝は暗れえうちに鐘がなるぞお。」

良平はふとんにもぐつた。妹のおさきは、もうすやすやとねむつて

いる。まぶたを閉じると、青さびたお寺の鐘が、頭の中でちらちら

した。

(二)

ゴーン、はげしい高い鐘の音がしだいに弱まつて、やさしい音色にかわり、オン、オンとかすかに消えいろうとすると、また強くゴーンとつき出される。強く弱く、高く低く、たんぽをわたり山をこえ、どこまでもひびいてゆく。

良平は、おさきと小川でさかなをとつていた。夕暮れのやわらかい陽が背中におどつていた。春だろ、小川の岸には、たんぽぽが咲いていた。大きなふなが草のかげにかくれた。良平はざるをもつて忍びよつた。ふなはじつとしてゐる。すばやくすくつた。見事にはいつた。白い腹を見せて、ふなはびんびんはねている。良平はとくいだつた。おさきを招いてびくに入れると、また魚をさがしながら、川の中を忍び足で歩いていつた。おさきはびくを大事に持つて、良平をたのもしげに見つめている。

お寺の鐘はまだ鳴つている。静かなやわらかい鐘の音が、川面を流れると、魚はうつとりして泳ぎをやめる。はげしい音がひびいてくると、ぎくつとして泳ぎはじめる。良平はつき出される鐘の音をはかつてざるを水の中に入れた。その度に面白いほど、魚がざるにすくいあげられた。

「鐘の音つて有難いもんだなあ。」

おさきのびくに入れるたびに、良平は心の中でつぶやいた。夕陽はかげりはじめた。ふたりは日の暮れるのも忘れて、夢中で魚をとつた。

「ほれ良坊、歸らんかい。お寺の鐘が鳴つてるじゃないかい。」

とがめるような聲がひびいた。見上げると父親が鯀をかついで立つていた。

「歸るんかい。魚がとてよくとれるんだよ。もうちよつと。」

「ばかこけ、お寺の鐘が鳴つたら、歸るんじや。」

「そうけえ、でも一匹大きいのがいるんになあ。」

良平はあきらめかねて、ざるを水の中にいれた。ゴン、ゴン、鐘は

つゞけざまに二つはげしく鳴つた。魚はおどろいて逃げた。

「ほれ見ろ、お寺の鐘もおしまいだ。魚も逃げた。歸るんじや、歸るんじや。」

おさきは父親と一しよにかえりかけた。良平はあわて、川をあがつて、二人をおいかけた。

「おさき、びくはおらがもつてく。」

良平はなかば怒つて、ざるをおさきからひつたくつた。ざるは道におちて、魚はびよんびよん川へとびこんだ。

「馬鹿野郎！」

父親の大きな聲がした。はつとした。そのはずみに目がさめた。「夢だつたのか。」

良平はほつとした。おさきは相變らずやすやすやねむつてゐる。せつかくとらえた魚を逃がしたのが、残念にも思われたが、やわらかい鐘の音を聞きながら、次々に魚をとつたことが、一そうなつかしく思われた。その時だつた。ゴーンと鐘が鳴つた。おやまだ夢を見てゐるのかなあ、良平は思わず頭をあげた。

「良坊、ほら朝の鐘が鳴つたぞ。」

父親が起きあがつて、良平の顔をのぞきこんだ。

「あれえ、もう目をさましていたんかい。小さい時とおんなじだ。」

父親は感心したような顔をして、母親を見た。母親ももう起きていた。

「鐘の音を聞いて起きるのは、いゝ氣持だね。これで昔の平和なくらしが、ほんとに歸つてきたよ。」

母親はいそいそと台所に出ていつた。鐘は次々につき出される。ゴーン、ゴーン、よわく、つよく、高く、低く、静かな朝の空氣をぬつて、ゆるやかに流れてくる。心を清め、一日の希望を興えるように、ひびいてくる。良平はうつとりと聞きほれていた。そして夢で見た、あの楽しい魚とりを想いうかべて、いやだつた戦争が、ほんとに終わったのだと、しみじみ考えていた。

すがすがしい朝の太陽が、障子をぼうつと白くそめはじめた。

編集後記

昨年の暮であつたと思う。北陸の尼さんが托鉢で集めたお米を持つて上京し、浮浪兒に施粥している寫眞が、新聞に掲載されたことがある。私はそれを見て、心が温くなり目頭がうるんだことを、今でも昨日のようにおぼえている。

宗教は理論ではない。體驗された信仰からにじみ出る行爲の世界である。深い信仰につらぬかれた人格は、身をやくような慈悲行に挺身するものである。人の苦しみを自ら感じ、自己を犠牲にしても他を救わずにはおれないものである。愛の灯を人々に點ずる大きな慈悲行であり、普通の社會事業に見るような、愛のおしりでは決してない。

十一月二十五日から嚴冬せまる街頭には社會事業共同募金運動が展開されている。インフレの昂進によつて約三百萬の生活困窮、要

保護者は死の冬に直面している。政治の貧困として傍觀する前に、温い救いの手をさしのべることは國民の責任である。彼等の今日の運命は個人的責任に歸せられるには餘りにも苛酷である。戦争犠牲者の色彩が非常に濃い。従つてその救済は全國民の共同責任でなければならぬ。

昔、スイスの高德な牧師が、木の幹にかたい樞の箱(チエスト)をゆわいつけ、**「與えよ、取れよ」**と書きしるした。金のある人はこの箱に金を入れ、明日のパンになやむ人は、ふるえながら必要な金をとり出した。こうしてこの箱は與える人にも受ける人にも大きな喜びのしるしとなつた。これが世界的運動として發展したコムミニテイ・チエストの發端である。

日本の共同募金運動もこの一環として行われているのであるが、その發端が温い宗教的愛によつて裏づけられていることを思う時、私たち佛教徒は今さら宗教的世界の

なにもものであるかを、再思三思すべきではあるまいか。

共同募金運動の國民的關心はあまり深くないといわれる。この運動がなるかならぬかは、日本人の愛の如何にかかつてゐる。長い間無宗教であつた日本人の心は、國民の助け合いという現在最も大切な事柄にも冷たい關心を示そうとするのであろうか。愛の缺乏、それは日本人の最も大きな缺陷であるが、それは宗教を忘れた當然の歸結である。新しい佛教家の進出は、お説教や深遠な佛教哲理をふりかざすことではない。温い心をもつて、人々の中に愛の灯を點ずる高德な士の出ることを、せまりくる嚴冬を前に一そう痛切に待望する。

師走の夜、火の氣のない部屋で編輯をおえて、この一雜誌が温い愛の灯とらんことを祈りつつ、ペンをおく。

◇先號の編輯後記は削除すべき文章がはいつてお迷惑をかけましたお詫びいたします。(東)

「浄土」 十二月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿二年十一月二十日印刷
昭和廿二年十二月一日發行
(定價五圓)

編輯兼 中村 辨 康
發行人

印刷人 春山治部左衛門
東京都千代田區神田保町三ノ十
印刷所 共立社印刷所

配給元
東京都千代田區淺路町二ノ九

發行所 法然上人鑽仰會
日本出版配給株式會社

東京都港區芝公園淨土宗務所
振替 東京八二一八七番
會員番號B一〇八〇一四

會費 金六十六圓
一ケ年

(送料六圓を含む)
振替拂込みはすべて二圓五十錢増のこと

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十二年十一月廿日印刷 昭和二十二年十二月一日發行

浄土 第十三卷 第十號

定價金五圓(送料五十錢)